

温故知新

静岡県立中央図書館所蔵の貴重書紹介(10) 平成12年10月1日

静岡の文化人(その2)

滑稽本作者・十返舎一九と『膝栗毛』

一九は明和2(1765)年駿河国府中(静岡市)伝馬町に生まれました。姓は重田、字は貞一、幼名は市九で、父は駿府町奉行の同心でした。十返舎一九の名は大阪在住時代嗜んだ香道の「十返り」と幼名の「市九」に因んでいます。父の没後一時後を継ぎましたがやがて弟にその職を譲り江戸に出、地本問屋鳥屋重三郎の食客となります。始めて重三郎に会った一九はこんな挨拶をしています。「私は東海道府中の生まれでも、決して不忠(府中)不義の子ではございません。親父は駿府町奉行組同心重田鮫八と申し、かたじけなくもお上から食禄を頂戴、お勤め一筋、両替町一丁目に住まいいたしております。」寛政7(1795)年彼の処女作となる挿画自筆の黄表紙「心学時計草」が出版され、以来次々と新作を発表し世に知られるようになりました。そして享和2(1802)年滑稽本「浮世道中膝栗毛 初編」(栄邑堂版)を出版し文名は急速に高まりました。

江戸から箱根の旅を描いた「浮世道中膝栗毛 初編」は内容があまりに突飛であったため版元蔦屋も出版を躊躇し、最終的には草双紙出版が主な村田屋が版元になりました。当初この初編と、箱根から岡部までの続編「道中膝栗毛 後編」で終わる予定でしたが、いざ出版されると予想外の好評を得、以後続々と編を重ねるようになりました。江戸から京都、大阪までの東海道中旅行記の正編は「初編」から「第八編」まで「発端」を含む18冊が出版されました。また文化7(1810)年の「続東海道中膝栗毛 初編」から「第十二編」までは大阪見物以降、金毘羅・安芸宮島参詣から木曾街道を経て善光寺・草津へ寄り江戸に戻るまでの総25冊となり、本編・続編を併せると享和2年より文政5(1822)年まで実に21年の長期間に渡って書き継がれたのでした。当館貴重書「道中膝栗毛」(当館請求記号K217/2)は発端、初編から十八編まで21冊所蔵があり、「続膝栗毛」は二編と十二編上・中巻が欠本の21冊所蔵があります。

狂言のシテ・アドを模した二人の主人公の伊勢参宮道中の滑稽譚は、狂言や小咄のパロディーを巧みに盛り込み、珍妙で滑稽、時に破廉恥な事件を中心に描かれ、旅行案内記的な性格も併せ持ち好評を博しました。人情の機微と当時の世の中を風刺した点において鬱積した当時の人心に大きな共感を与えたのです。ところで弥次・喜多両人は、暫くの間はその素性には触れられませんが、「発端」の巻で、途中ある人に出生地を尋ねられ、弥次郎兵衛は駿河の府中生まれの裕福な商人、喜多八は駿河の江尻(清水市)出身の役者花水多羅四郎の弟子鼻之助と説明されています。

ユーモラスな作品とは対照的に一九は気難し屋で偏屈な性格だったと言います。酒好きで借家住まいの貧乏な生活を送り奇行の数々を繰り返す、天保2(1831)年8月7日江戸長谷川町の裏長屋で病没しました。享年67歳、浅草善竜寺(東京都中央区)の東陽院に埋葬されました。自分の死を予期していた一九は、死の前日棺の中に線香花火を入れさせておき、火葬の際に爆発させ甲問客を驚かせたと言います。辞世の狂歌は

「此の世をばどりやおいとまに せん香の煙りと
共に灰左様なら」

【参考文献】

「発端」の編 ふたりの素性を述べている部分

「静岡名人崎人伝」(S280/31)

「古典の事典」(025.1/159)

「日本の作家35 十返舎一九」(913.55/外)